

宣教師への事実無根の記事について

3月21日の『パイヌ』の第一面に「バチカン、宣教師により数百人の修道女が性的暴力を受けたことを認める」という見出しが載っていた。私はこの見出しに腰を抜かささんばかりに驚いた。数十年宣教師としてアフリカに住んでいたのに、この事実について聞いたことがなかったからだ。私はばかなのだろうか。新聞の中にある問題の記事を読むと、記事には宣教師による修道女に対する暴力の一つの事例も出てこない。ますます不可解。どうやら、すべては“Nacional Catholic Reporter”に載った一つの記事に拠っているらしい。この記事を読んで見る。すると、現地の聖職者による修道女に対する暴行数件（数百なんて決してない）が語られていたが、宣教師による事件は一つも言及されていない。宣教師には関しては、必要な手段をとるように、犯された犯罪が何らかの形で償われるように、またこのようなことが二度と繰り返されないように、この事件の真相究明に協力したと出ているが。

新聞の明らかな情報の歪曲を目にし、また『パイヌ』によって起された波が他のマスコミによって波及されることを鑑みて、諸宣教会連盟の議長団は、不正確で悪意によって出された見出しについて『エル・パイヌ』の編集長に声明文を送った。

数時間もたたないうちに『エル・パイヌ』の編集委員から電話を受けた。諸宣教会連盟の副議長としての私に彼は次のように説明した。例の見出しは誤りです、あの見出しは新聞の魔力のようなものの結果で思わず出たものです・・・。

それに対して私は答えた。そういうことは起るはずがない。新聞の第一面は、必ず編集長がチェックするはずだと。

私が宣教師であるにもかかわらず新聞社の内部を少し知っている（これは私の功德ではないが）と気づいた彼は、戦術を変更した。マスコミの世界のことを話す。情報の市場はスキャンダルしか望まないこと、見出しが派手でないと誰も読まないこと、新聞社もお金をもうけないといけないこと・・・。

私は、『エル・パイヌ』が低俗な大衆紙とは知りませんでした、と言い、訂正記事を要求した。彼は答える。もちろん、編集長に話します。なにかするでしょう・・・。

今日、『エル・パイヌ』紙を覗いてみた。私が見つけた訂正記事は、「宣教会連盟は昨日新聞の見出しで宣教師が性的暴力の罪を問われたことを批判した」と書いてあった。これが訂正なのか。

一つの話をつけ加えたい。『エル・パイヌ』の記者がアフリカに取材に行くとき、普通は巫宣教師たちの家に宿泊を依頼する。彼らは、そこで実際に見たことを記事にする勇気があるのだろうか。自分の新聞が報道した偽りを認める気概があるのだろうか。もし、それができないなら、アフリカに行くとき再び我々と食卓を共にするつもりなのだろうか。

ひょっとしたら君に興味があるかと思ってこれを伝えます。もしe-mailでつながっている友人たちがいるなら、この話を伝えてください。新聞が真実を隠すなら、私たちが伝えよう。

サルバドル・ロmano・ビダル（ザビエル宣教会）

注、『エル・パイヌ』紙は、スペインで最もよく読まれている新聞の一つ（社会党系）です。